

無彩色嗜好と自己イメージの関連

羽 成 隆 司*・高 橋 晋 也**

Preference for achromatic colors and self-images

Takashi HANARI and Shin'ya TAKAHASHI

1. はじめに

1-1. 色嗜好に関する一般的傾向

色嗜好の一般的特徴については、これまでに行われた多くの調査によって検討されてきた（Eysenck, 1941；Adams & Osgood, 1973；日本色彩研究所, 1995；千々岩, 1999；Dittmar, 2001；Saito, 1999 ほか）。そして、色相では青が最も好まれること、中間色よりも基本色相が好まれやすいこと、トーンではビビッドやライトが好まれること等が明らかにされている。

筆者らも、大学生を対象とした色嗜好調査を継続して行ってきた（高橋・羽成, 2005, 2008；Hanari & Takahashi, 2005, 2008 ほか）。それらでは、上述した一般にもっとも好まれるとされる青以上に、黒と白の方が上位に位置づけられるという結果が一貫して見出されている。日本をふくめ、中国、韓国、台湾、インドネシアといったアジア諸国では、以前から白の嗜好順位は高かったが（齋藤, 2009）、最近の日本人大学生においては、白に加えて黒が最上位になるという従来とは異なる特徴がある。

1-2. 無彩色に伴うイメージ

黒あるいは灰といった無彩色があまり嗜好されなかった理由は、これらが時代や文化を越えて、ネガティブな連想をもたらしやすい色であるためであろう。

例えば、近江（2003）が紹介している日本人を対象とした連想調査では、黒は、“暗やみ、喪服、暗い、無”等と、灰は、“くもり空、雨の日、霧”等と連想づけられている。松本が1926年に発表した日本人による最初の色彩連想調査でも、黒は、“力強、深、崇高、高尚”のようなポジティブな語も挙げられているが、“陰鬱、恐怖、悲哀、寂寥”，灰は、“寂寞、陰鬱、不純”といったネガティブな語の方が目立っている。さらに、日本の女子短大生を対象としたイメージ調査では、“怒り、罪、孤独、不安、恐怖”といった単語から連想され

* 文化情報学部 文化情報学科

** 名古屋大学大学院環境学研究科

る色の上位3つの中に、いずれも黒が含まれていた(大山ら, 1963; 大山, 1994)。しかも, こうした傾向は, 最近行われた同様の調査でもあまり変わっていない(伊藤, 2008; 大山, 2009)。

西洋の文化でも, 黒は, “土, 肥沃, 豊饒, 知恵, 子宮”といったポジティブな連想がなされる一方で, “死, 服喪, 腐敗, 夜, 誤り, 無知, 無, 悪, 罪, 悪魔, 迷信, 悲しみ, 危険, 悲嘆”等が, 灰では, “中立, 禁欲, 繁茂, 放棄, 老年, 回顧, 懺悔, 哀悼, 空虚, 曖昧, 隠蔽, 無気力”といった連想が代表的である(アト・ド・フリース, 1984)。

一方, 同じ無彩色でも白については, 冷たさ, 死などの連想もされやすいが, ポジティブな連想の方が多い。上記の調査では, “ウェディングドレス, シャツ, 清潔, 雪, 雲, 清浄, 潔白, 神聖, 崇高, 荘厳, 純潔, 貞節, 聖性, 完全性, 光明, 啓示, 真理, 尊厳, 高貴, 歓喜, 理性, 昼間, 無意識, 平和, 慈悲”等が挙げられている。

1-3. 本研究の目的

本研究では, 無彩色嗜好に焦点を当て, それを規定する要因について考えてみたい。無彩色に着目する理由は, 色が象徴するイメージ調査や, 色とパーソナリティとの関連にかんする様々な色彩理論では, 無彩色(とくに黒や灰)が, ネガティブな内容と関係づけられることが多いにも関わらず, 上述したように, 最近の日本人大学生の中にはとくに黒を強く嗜好する者が少なくないからである。そして, 「無彩色嗜好者は, ネガティブな連想を伴う色をあえて好むことによって, “一見ネガティブであるが, 反面それがクールでかっこよい”という自己イメージの確認や表出を行っているのではないか」という仮説を検討する。

本論文では, 黒, および, 白, 灰を含めた無彩色を主たる分析の対象とし, 自己イメージとの関連について, 探索的な分析を行った結果を報告する。ここでは, “一見ネガティブであるが, 反面それがクールでかっこよい”自己イメージとして, “他者とは相容れない”, “情動的な刺激に簡単には踊らされない”, “物事の判断を簡単には下さない”等を想定してみた。そして, それぞれを測定する質問項目への回答と無彩色を好む程度との相関を中心に分析した。

2. 調 査 1

2-1. 方法

- (1) 調査対象: 大学生 363 名(男性 171 名・女性 191 名・不明 1 名; 平均年齢 20.1 歳)分のデータを分析対象とした。
- (2) 手続き: 質問紙調査を集団実施した。質問紙は 2 部からなる。第 1 部では赤, だいだい, 黄, 黄緑, 緑, 青, 紫, ピンク, 茶, 白, 灰, 黒の 12 色名を呈示し, それぞれの好嫌度を visual analog scale (VAS) で測定した(図 1)。第 2 部では, 自己イメージに関わる認知の程度を測定する 12 の質問項目(表 1)について, 6 件法で測定した。
- (3) データ処理: VAS 評定については, 各色に対するチェック位置を計測後, 「まったく好きでない」の端が 0, 「まったく好き」の端が 100 となるよう数値化した。

無彩色嗜好と自己イメージの関連

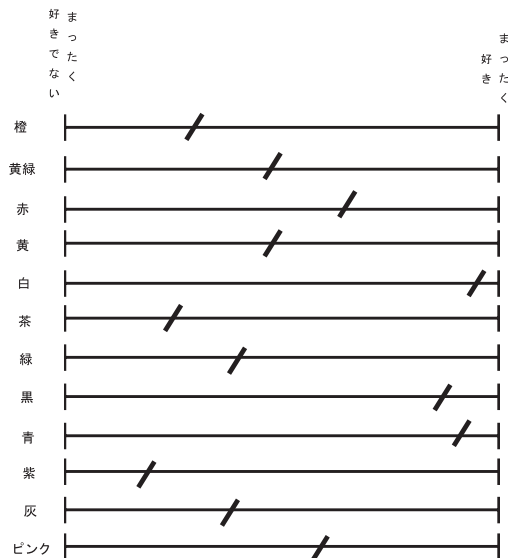


図 1. Visual Analog Scale (VAS)

表 1. 自己イメージ測定項目（調査 1）

1. 自分の気持ちや考えていることを，他人に悟られたくない。
2. 謎めいたイメージで見られたい。
3. 自分を固定した印象で見られたくない。
4. 悩み事があれば，友人に相談したくなる*。
5. 自分だけの秘密は，あまり持ちたくない*。
6. 自分らしさを周りの人に明確に伝えたい*。
7. 就職，結婚など，自分の将来設計をはっきり立てている*。
8. 将来のことは，その場その場で考えればいいと思う。
9. 計画立てて物事を進めることが嫌いだ。
10. 何事につけ決断を先延ばしにしよう。
11. 決定を急がず，慎重に物事を進めるたちである。
12. 自分の意見は，つねにはっきりさせておきたい。

*逆転項目

2-2. 結果と考察

(1) 因子分析：第 2 部のデータについて，12 項目全体の因子分析（主因子法，バリマックス回転）の結果，複数の因子に負荷していた 2 項目（表 1 の第 11 項目と第 12 項目）を削除し，残りの 10 項目で再度因子分析にかけた。その結果，固有値 1.0 以上の 3 因子が得られ（分散の累積説明率 52.8%），第 I 因子を「判断抑制」，第 II 因子を「自己非開示」，第 III 因子を「秘密主義」とした（表 2）。調査対象者ごとに質問項目 7～10，4～6，および 1～3 の平均評定値を算出し，それぞれ抑制得点，非開示得点，秘密得点とした。信頼性係数（ α ）は，順に，.484, .554, .632 であった。

(2) 色嗜好の全体的傾向：男女でわずかな違いはあるが，いずれも黒と白が上位 2 色となっ

ており、青（第3位）を上回っていることから、黒・白の評価の高さが再確認された。ただし、灰は第11位であった（表3）。

(3) 各無彩色 VAS 値と自己イメージ得点との相関：白・黒・灰の各 VAS 値は、それぞれ正相関が有意であった。3つの自己イメージ得点との相関では、黒の VAS 値は秘密得点、灰の VAS 値は非開示得点と有意な正相関を示した。一方、白の VAS 値は抑制得点、非開示得点と有意な負相関を示している（表4）。

(4) 各無彩色の偏好度と自己イメージ得点との相関：これまで報告者らが色嗜好の指標として用いてきた“偏好度”を各無彩色について求めた。偏好度とは特定の色を他の色と区別してどの程度好むかを示すもので、ここでは“各無彩色の VAS 値と各有彩色の VAS 値との差の平均値”によって算出される（実際の算出式は、偏好度＝各無彩色の VAS 値－有

表2. 自己イメージ因子分析の結果（調査1）

	I	II	III
1. 自分の気持ちや考えていることを、他人に悟られたくない。	-.087	.240	.745
2. 謎めいたイメージで見られたい。	.047	.003	.717
3. 自分を固定した印象で見られたくない。	.000	-.306	.543
4. 悩み事があれば、友人に相談したくなる*。	.007	.766	.024
5. 自分だけの秘密は、あまり持ちたくない*。	.014	.667	.395
6. 自分らしさを周りの人に明確に伝えたい*。	.166	.680	-.316
7. 就職、結婚など、自分の将来設計をはっきり立てている*。	.662	.194	-.064
8. 将来のことは、その場その場で考えればよいと思う。	.655	.040	-.043
9. 計画立てて物事を進めることが嫌いだ。	.738	.026	-.083
10. 何事につけ決断を先延ばしにしてしまう。	.691	-.017	.169

* 4, 5, 6, 7は逆転項目。得点を逆転させた上で分析にかけた。

表3. 各色の VAS 平均値（調査1）

	黒	白	青	赤	橙	紫	緑	ピンク	茶	黄	灰	黄緑
全体	78.5	77.4	69.6	64.5	58.2	57.4	56.9	56.5	54.9	54.8	52.3	49.9
男性	77.4	74.8	72.4	65.1	53.4	51.0	58.8	46.4	53.4	53.3	52.3	49.0
女性	79.5	79.8	67.1	64.1	62.5	63.1	55.1	65.4	56.1	56.2	52.3	50.8

表4. 無彩色の VAS 値と自己イメージ得点との相関（調査1）

	白	黒	灰	抑 制	非開示
白	-				
黒	.286**	-			
灰	.157**	.350**	-		
抑 制	-.114*	-.008	.067	-	
非開示	-.133*	.066	.145**	.187**	-
秘 密	.038	.132*	.064	-.034	.043

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 5. 無彩色の偏好度と自己イメージ得点との相関（調査 1）

	白	黒	灰
白	—		
黒	.381**	—	
灰	.258**	.451**	—
抑 制	.094	.007	.074
非開示	-.056	.123*	.192**
秘 密	.028	.112**	.053

* $p < .05$, ** $p < .01$

彩色 9 色の VAS 値の平均)。

白・黒・灰の各偏好度も、それぞれ正相関が有意であった。自己イメージ得点との関係については、非開示得点と灰と黒の偏好度、秘密得点と黒の偏好度との間に正相関が認められている（表 5）。

2-3. 調査 1 のまとめ

調査 1 の結果、無彩色への嗜好は、VAS 値、偏好度いずれについてもすべて正相関していること、黒嗜好と灰嗜好は「秘密主義」や「自己非開示」と関係していることが見出された。

一方、白嗜好は自己イメージとの関連が不明瞭であった。白の VAS 値と抑制得点および非開示得点とが負相関であったこと、偏好度についてはいずれの相関も見られなかったことから、同じ無彩色でも黒嗜好や灰嗜好とは異なる白嗜好の特性が伺われる。

3. 調 査 2

調査 2 では、自己イメージ測定尺度を一部修正し、調査 1 と同様の分析を行った。

3-1. 方法

- (1) 調査対象：大学生 271 名（男性 85 名・女性 186 名；平均年齢 20.5 歳）分のデータを分析対象とした。
- (2) 手続き、データ処理：自己イメージ尺度の質問項目以外は、調査 1 と同一であった。自己イメージ尺度は、調査 1 で用いた項目の一部を修正し、あらためて 12 項目を設定した（表 6）。

3-2. 結果と考察

- (1) 因子分析：自己イメージ尺度 12 項目全体の因子分析（主因子法、バリマックス回転）の結果、複数の因子に負荷していた第 1 項目を削除し、11 項目で再度因子分析にかけた。その結果、固有値 1.0 以上の 3 因子が得られ（分散の累積説明率 52.7%）、第 I 因子を「自己非開示」、第 II 因子を「神秘性」（調査 1 では「秘密主義」としたが、「神秘性」の方が適

切であると判断し、変更した), 第Ⅲ因子を「判断抑制」とした(表7)。調査対象ごとに質問項目5～8, 2～4, 9～12の平均評定値を算出し、それぞれ非開示得点, 神秘性得点, 抑制得点とした。信頼性係数(α)は, 順に, .670, .637, .532であった。

(2) 色嗜好の全体的傾向: VAS 評定平均値の上位2色は, 白と黒であった。灰は第12位であった(表8)。順位と数値に若干の差異が見られるが, 調査1と同様の傾向が確認された。

表6. 自己イメージ測定項目(調査2)

1. 自分の気持ちや考えていることを, 他人に悟られたくない。
2. 謎めいたイメージで見られたい。
3. 自分を固定した印象で見られたくない。
4. 多くの意外な一面を持っているように思われたい。
5. 悩み事があれば, 友人に相談したい*。
6. 自分だけの秘密は, あまり持ちたくない*。
7. 自分らしさを周りの人に明確に伝えたい*。
8. 初対面の人に対してでも, 積極的に自分のことを話したい*。
9. 就職, 結婚など, 自分の将来設計をはっきり立てている*。
10. 将来のことは, その場その場で考えればいいと思う。
11. 計画立てて物事を進めることが嫌いだ。
12. 何事につけ決断を先延ばしにしてしまう。

*逆転項目

表7. 自己イメージ因子分析の結果(調査2)

	I	II	III
2. 謎めいたイメージで見られたい。	-.180	.727	.116
3. 自分を固定した印象で見られたくない。	.055	.660	-.129
4. 多くの意外な一面を持っているように思われたい。	.135	.839	-.031
5. 悩み事があれば, 友人に相談したい*。	.779	-.121	.038
6. 自分だけの秘密は, あまり持ちたくない*。	.610	-.214	-.024
7. 自分らしさを周りの人に明確に伝えたい*。	.651	.397	-.127
8. 初対面の人に対してでも, 積極的に自分のことを話したい*。	.736	.209	.003
9. 就職, 結婚など, 自分の将来設計をはっきり立てている*。	.307	.133	-.652
10. 将来のことは, その場その場で考えればいいと思う。	.056	.061	.698
11. 計画立てて物事を進めることが嫌いだ。	.173	-.119	.644
12. 何事につけ決断を先延ばしにしてしまう。	-.074	.047	.563

*5, 6, 7, 8, 9は逆転項目。得点を逆転させた上で分析にかけた。

表8. 各色の VAS 平均値(調査2)

	白	黒	青	赤	ピンク	橙	緑	黄	茶	紫	黄緑	灰
全体	79.0	78.6	68.7	64.9	62.5	61.1	59.6	59.0	55.4	53.2	51.1	49.2
男性	75.5	76.5	74.8	62.4	49.4	57.7	63.9	54.8	51.9	51.3	54.0	50.7
女性	81.2	80.0	64.8	66.5	70.8	63.2	56.9	61.7	57.6	54.4	49.2	48.2

無彩色嗜好と自己イメージの関連

表 9. 無彩色の VAS 値と自己イメージ得点との相関
(調査 2)

	白	黒	灰	抑 制	非開示
白	—				
黒	.265**	—			
灰	.129**	.375**	—		
抑 制	-.111*	.037	.043	—	
非開示	-.070	.039	.143**	.121**	—
神秘性	-.018	.071	.025	-.070	-.093*

* $p < .05$, ** $p < .01$

表 10. 無彩色の偏好度と自己イメージ
得点との相関 (調査 2)

	白	黒	灰
白	—		
黒	.393**	—	
灰	.217**	.453**	—
抑 制	-.108*	.020	.037
非開示	-.007	.080	.183**
神秘性	-.009	.068	.026

* $p < .05$, ** $p < .01$

(3) 各無彩色 VAS 値と自己イメージ得点との相関：調査 1 と同じく、白・黒・灰の各 VAS 値は、それぞれ正相関が有意であった。3つの自己イメージ得点との相関では、灰の VAS 値が非開示得点と有意な正相関、白の VAS 値が抑制得点と有意な負相関であった。これらはいずれも調査 1 と同じ結果である。一方、黒の VAS 値については、いずれの得点との相関も認められなかった (表 9)。

(4) 各無彩色の偏好度と自己イメージ得点との相関：非開示得点と灰の偏好度が有意に正相関であり、調査 1 と同様の傾向が再現された。また、抑制得点と白の偏好度の負相関が有意であった。一方、黒の偏好度についてはいずれの自己イメージとの相関も有意ではなかった (表 10)。

3-3. 調査 2 のまとめ

無彩色への嗜好は、VAS 値、偏好度いずれも相互に正相関していること、灰は VAS 値、偏好度いずれも非開示得点と正相関であったこと、および、VAS 値と偏好度で傾向は異なるが、白にかかわる特徴については調査 1 と類似の結果であった。これに対して、黒は調査 1 と同じ傾向は確認できなかった。

4. 討 論

いずれの調査でも、白と黒に比べて嗜好度が低い灰も含め、無彩色への嗜好はすべて正相関していたことから、無彩色に共通する嗜好傾向の存在が伺われる。しかし、自己イメー

ジとの相関の特徴が、黒、灰、白それぞれで異なることから、「無彩色嗜好」というように一括りにして共通する自己イメージを特定することは適切ではないと思われる。そこで、以下、色ごとに言及する。

自己イメージとの関連がもっとも明確に認められたのは、灰嗜好であった。調査1では秘密得点と、また、両調査共通して、非開示得点との正相関が有意であった。これらから、灰嗜好者は、自身を他者に開示しようとししないイメージを自らに当てはめているのではないかと推測できる。

黒は、調査1では、灰と同じく、秘密得点や非開示得点との正相関が認められたが、調査2ではいずれの自己イメージとも関連が見出せなかった。一般に連想される内容がネガティブであるのに対して、嗜好する者が最近非常に多くなっている点が興味深い黒であるが、本研究では自己イメージとの関係を特定できなかった。

黒が若者に好まれる要因として、持ち物——とくに衣服——との関連が考えられる。黒はファッションの場面では、色そのものからの連想とは異なり、むしろ知的でクールな雰囲気をもたらし効果を持った色として位置づけられている。このきっかけとなったのは、1980年代のハイ・ファッションにおける黒の流行（日本のメゾンであるコム・デ・ギャルソンやY'sによる黒の多用）であるが、これ以降、とくに都市部における若者の衣服に黒は多用されている。このような事情から、ふだん身につける衣服との関係で黒に対する嗜好が高まる可能性もある。この可能性を分析するには、衣服を含めた持ち物の色にどのような色を選ぶかという調査を導入する必要がある、今後の検討課題としたい。

白は、自己イメージとの関連において、黒や灰とは異なる特徴を持っているようである。2つの調査で傾向が完全に一致しているわけではないが、抑制得点あるいは非開示得点と負相関であり、無彩色であっても、黒や灰とはむしろ逆の自己イメージと関連しているように思われる。この点は、黒や灰と異なり、白は以前から現在に至るまで人気色であって、連想されるイメージもポジティブなものが多いという特徴とも符合している。

以上、色による傾向は異なるが、無彩色嗜好と特異的な自己イメージとの関連が認められたことは、色嗜好の規定要因として、自己イメージのような認知的要因も重要であることを示すものと言えよう。

色嗜好の規定要因については、生得的で快－不快感情による普遍的嗜好、生得的または獲得的な個人的嗜好、人口学的要因（年齢・性）、心理学的要因（パーソナリティ）、生育歴や生活史等の要因、社会文化的要因（流行・慣習等）、歴史的要因、地理的要因等が指摘されている（齋藤，2009）。色相では青を筆頭にした基本色相、トーンではビビッドやライトが好まれるという冒頭で述べた諸傾向には時と場所を超えてかなりの一貫性が見られることから、これらは生得的で快－不快感情による普遍的嗜好の現れと言えるであろう。また、性、年齢、地域を変数とした分析や、比較文化研究の結果は、色嗜好が刺激側に依存する普遍的な要因だけでなく、年齢、性、文化等によって変動し、決定されるということを証明している（Chou and Chen, 1935；Choungourian, 1968ほか）。

一方、高橋・羽成（2005, 2008）は、認知課題の導入が色嗜好を変動させるという結果から、「色嗜好が、各色に固有の感覚的性質が生じさせる快／不快感の表出というより、各色から喚起される様々なイメージに対する認知的評価の表出としての側面を色濃くもつ」と、認知的要因の効果を指摘している。

本研究が分析の対象としたのは無彩色のみであるが、ここで見出された諸結果もまた、色嗜好を規定する認知的要因の重要性を示唆するものと言えるであろう。

5. 引用文献

- Adams, F. M. and Osgood, C. E. (1973) A cross-cultural study of the affective meanings of color. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 4, 135-156.
- アト・ド・フリース著, 山下主一郎主幹, 荒このみ他訳 (1984) イメージ・シンボル事典。大修館書店。
- 千々岩英彰 (1999) 図解 世界の色彩感情事典 世界初の色彩認知の調査と分析, 河出書房新社。
- Choungourian, A. (1968) Color preferences and cultural variation. *Perceptual and Motor Skills*, 26, 1203-1206.
- Chou, S. K. and Chen, H. P. (1935) General versus specific color preferences of Chinese students. *Journal of Social Psychology; Political, Racial and Differential Psychology*, 6, 290-314.
- Dittmar, M. (2001) Changing colour preferences with aging: A comparative study on younger and older native Germans aged 19-90 years. *Gerontology*, 47, 219-226.
- Eysenck, H. J. (1941) A critical and experimental study of colour preferences. *The American Journal of Psychology*, 54, 385-394.
- Hanari, T and Takahashi, S. (2005) Relationship between cognition/attitude on colors and color preference style. *10th Congress of AIC05, Proceedings*, 2005-1, 329-332.
- Hanari, T. and Takahashi, S (2008) Particular self images related to the preference for achromatic colors. *AIC Colour 08 Interim Meeting on "Colour-Effects & Affects", Proceedings CD*, paper no 063 (4 pages)
- 伊藤久美子 (2008) 色彩好悪と色彩象徴の経年比較。デザイン学会誌, 55, 31-38。
- 大山正 (1994) 色彩心理学入門——ニュートンとゲーテの流れを追って 中央公論社。
- 大山正 (2009) 色の知覚・感情効果 大山正・齋藤美穂編 色彩学入門 (第3章), pp. 56-63。東京大学出版会。
- 大山正・田中靖政・芳賀純 (1963) 日米学生における色彩感情と色彩象徴 心理学研究, 34, 109-121。
- 近江源太郎 (2003) カラーコーディネーターのための色彩心理入門, 日本色研事業株式会社。
- Saito, M (1999) "Blue and seven phenomena" among Japanese students. *Perceptual and Motor Skills*, 89, 532-536.
- 齋藤美穂 (2009) 嗜好と文化 大山正・齋藤美穂編 色彩学入門 (第3章), pp. 64-91。東京大学出版会。
- 高橋晋也・羽成隆司 (2005) 色嗜好表出における認知要因。日本色彩学会誌, 29(1), 14-23。
- 高橋晋也・羽成隆司 (2008) 色嗜好表出における認知要因(2): 手続き変更による既報知見の一般化の試み。日本色彩学会誌, 32(4), 282-289。
- 財団法人日本色彩研究所 (1995) 日本人の色の好み 1979 ~ 1992, 財団法人日本色彩研究所。